

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	特集
タイトル	博士後期課程での社会人大学院生の研究指導 — Practitioner-Researcher Model —
Title	
著者	仁平義明・児玉ゆう子
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.4
号	No.2
ページ	pp. 7-12
発行日	March 27, 2023
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000337/

特集

博士後期課程での社会人大学院生の研究指導 — Practitioner-Researcher Model —

仁平 義明^a・児玉 ゆう子^a
(星槎大学大学院教育学研究科)

令和2年4月、星槎大学大学院教育学研究科に博士後期課程が開設された。その初年度に入学し本稿の筆者たちが主・副研究指導教員になった学生が提出した博士学位論文は、令和5年2月22日の教授会で合格の判定がされた。当該学生は、航空自衛隊の心理療法士としてカウンセリングなど心理的支援を行っている社会人大学院生で、論文のタイトルは、『『航空自衛隊レジリエンス・トレーニング』に関する研究 — 新しい『包括的アサーション・トレーニング』の開発と効果の検証 —』である。

本稿では、その大学院生の3年間の指導を具体的なケースとして振り返ることで、職業を持って入学し、修了後もその実務を継続する社会人を対象にした博士課程の教育のモデルと、Zoomによる指導の意味について考えることにしたい。博士後期課程開設以来、入学式当日を含めてこれまでの3年間は、新型コロナウイルス感染症の蔓延のため対面の指導を一切行えず、指導をZoomに頼るという特異的な教育体制になっていたからである。

われわれ筆者2人は、3年間の指導の過程では、学生の学会発表のスライドや学会誌への投稿論文、学位論文の原稿をつねに共有するかたちで連携をはかってきた。さらに、副研究指導教員は、研究指導I・IIの判定委員会、学位論文の事前審査委員会、本審査委員会すべての委員長をつとめ、共に研究全体の指導過程にかかわってきている。

なお、本稿の内容を公開することについては、当該学生の了承を得ている。

1. 博士後期課程の目的と特徴—「実務家-研究者モデル」—

1) 専門職博士課程の教育モデル

看護 (Jarvis, 2000)、心理臨床 (Snow et al., 2009)、教育 (Abukari & Abubakar, 2018) のほか、たとえばグラフィック・デザイン (Winters, 2012) など多様な実践の場で、教育のモデルとして「実務家-研究者モデル」(practitioner-researcher model) が提唱されてきている。どの分野でも、実務家と研究者、両方の視点をもった人材とそのための教育が必要であるという考え方である。

^a 星槎大学大学院教育学研究科博士後期課程教授

実務家社会人学生を受け入れる大学院の教育モデルの一つには、ほとんどの場合、この「実務家-研究者モデル」が含まれる。Rossen & Oakland (2008) は、アメリカ心理学会が認証している全国192の専門職博士課程プログラム（臨床心理、カウンセリング、学校分野）の教育的指向について調査を行った。その結果、教育プログラムは、「研究者（a research scholar）モデル」（主に研究指向）と「実務家（a practitioner）モデル」（主に実務指向）を両極として、「研究者または実務家（a research scholar/practitioner）モデル」、 「研究実務家（a research practitioner）モデル」、 「実務家-研究者（a practitioner researcher）モデル」を含む5つにカテゴリー化された。「研究者モデル」と「実務家モデル」、その間の3つの教育モデルの割合は、順に6%、28%、47%、12%、7%であった。USAの心理学専門職博士課程では、研究あるいは実務どちらかのみを主に指向する教育プログラムの割合は一桁にとどまっていて、ほとんどが「実務家-研究者モデル」あるいはそのバリエーションである。本学の博士後期課程も教育のモデルとして「実践と理論の往還」をうたっており、「実務家-研究者モデル」の教育を指向しているといえる。

2) 実務家の役割についての教育

実務家の役割は、根拠に基づいて対象者に最適だと考えられる実践を行うことである。教育者であれば、現在とっている教育方策が、子どもたちのために最適な解なのかを問い続けることである。医療を考えればわかりやすいが、現在使用している薬物や療法よりも効果量が大きく副作用も少ないもの、かつ現在の制度内で許容されるものが存在するのにもかかわらず、これまでは効果があったという理由だけで自分が慣れ親しんできた治療法を継続するのであれば、治療者の怠慢、ときには罪だともいえる。教育も同様である。求められるのは、「根拠に基づく医療」（Evidence-Based Medicine）、「根拠に基づく教育」（Evidence-Based Education）である。

Straus et al. (2011, p.1) は、「根拠に基づく医療」に必要なことは、(1) 最良の研究による証拠を、(2) 臨床経験、(3) 患者自身の価値観・臨床上的状態と統合することだとしている。同じように、「根拠に基づく教育」は、(1) 現時点での最良の研究による証拠を、(2) 教育経験、(3) 子ども自身の価値観・発達の状態と統合することだといえるだろう。

本学の社会人大学院生も実務家として、こうした知識をある程度は持っているが、医療分野を除けば、実践の根拠になる8段階（1a, 1b, 2a, 2b, 3a, 3b, 4, 5）の「エビデンス・レベル」（Straus et al., 2011, p.127）の意義などについて十分な知識を持っているとはいいいにくい。修士課程でも博士後期課程でも、エビデンス・レベルの問題は研究法に関する教育で共通に扱う必要がある内容だろう。これまで惣脇（2010）をはじめとして国立教育政策研究所や文部科学省も「根拠に基づく教育」政策の重要性を強調するようになったが（文部科学省、2018）、「根拠に基づく教育」の問題を現場の実務家のための教育プログラムの中にとどめていくかは、まだ課題の段階にとどまっている。

3) 研究者の役割についての教育—「巨人の肩の上に立つ」—

実務家は、根拠に基づいて既存の方策の中から最善のものを選ぶことで自分の役割を果たすことができる。ときには現在は最善だとされている方策でも自分が直面する問題を解決出来ない場合、自分なりに「新しいと思う」解を出すこともある。

しかし、実務家が同時に研究者でもあるといえるためには、さらに重要な条件がある。「研究者」の役割は、後に続く研究者や実務家のために「新しい」エビデンスとなるような知見を、これまでの研究者の成果の上に乗って自分自身で提出することにある。学生が文献検索にしばしば利用する Google Scholar の日本語検索ウィンドウの下には「巨人の肩の上に立つ」という Newton も用いたことばが書かれている。英文のページでは、「Stand on the shoulders of giants」と複数形で「多くの」巨人、すなわち「多くの」先行研究者による「多くの」知見の上に乗って研究を進めるという考え方が強調されている。修士課程の段階から学生たちに求められているのは、研究のスタートで、自分が扱おうとする問題のうちそれまで明らかにされてきた多くの事実はどのようなことか、何が明らかになっていないことなのか、自分が「新しく」明らかにしようとすることはどんなことか、オリジナリティはどこにあるのかを明示することである。

オリジナリティを明らかにするとき、なぜ、日本語文献だけでなく外国文献を含めた先行研究の検索と読みこみをしなければならないかも、検索でヒットする文献数を比較すれば一目瞭然である。たとえば、「レジリエンス・プログラム」について検索してみると、日本語文献の「CiNii」では28件なのに対して、国際的な文献データベース「Ovid」では3,470件がヒットする。博士後期課程設置の際に文部科学省から外国文献のデータベース、電子ジャーナルの整備を求められた理由、入学試験に英語による試験がある理由、博士学位論文審査のルーブリックの審査の観点に「国内外の文献の利用・・・により研究の背景や意義とともに、論旨を説得的に示していること」という項目がある理由も、ここにある。

実務を持つ社会人を対象にした博士課程の教育の目的は、上記のような姿勢を含めて、実務家と研究者の2つの視点と役割をともに持ちうるような人材を育成する「実務家-研究者」教育モデルにあるといえる。

博士後期課程の教育は、修士課程で「研究者」としての教育を受けてきていることを想定している。ただし、学生には、修士論文を書かない専門職大学院の修了者で、学会発表や学会誌への論文投稿も経験したことがない者もいる。その場合は、研究を行って学会誌に投稿する論文や学位論文を書いていくために必要な知識やスキルのうち何が不足しているのかをはかりながら、研究者としての教育をスタートしなければならない。幸い、指導学生が本学の修士課程からの進学者だったことは、博士後期課程での研究計画の立案にも研究の円滑な進行にもプラスに働く結果につながったと考えられる。

「航空自衛隊レジリエンス・トレーニング」をテーマとする博士論文は、社会人大学院

生が自らの心理療法士としての業務経験に基づいて未解決な問題にアプローチし、航空自衛隊で従来行われていたレジリエンス・トレーニングの問題点を解消するために新たに考案したトレーニングの効果を確認した研究の成果である。その意味で、学位論文は「実務家-研究者」の立場から書かれた典型的な論文になっている。

2. 社会人大学院生の実情と Zoom 指導

1) 実務家としての社会人大学院生の学修

本学の博士後期課程大学院生は、現在、全員が職業を有している。そのため、職業生活を経験しないで「学部→修士課程（博士前期2年の課程）→博士後期課程」とストレート・コースを辿った通学制博士後期課程の学生と同じだけの時間、博士論文の研究に専念することはほとんど不可能である。生活時間の大部分は勤務する組織での業務やそのための準備、たとえば教育や授業準備などに割かれ、家庭生活にも相当な時間が割り当てられる。大学院での学修は、土日の一部や、平日の夜間など、残りの「すきま時間」（指導学生自身による表現である）をやりくりしながら行なわれるのが実情だろう。学修に使える時間の総計は、多くない。

覚悟して入学したはずではあっても、この状況で社会人大学院生が3年で博士学位論文を完成させるのは容易ではない。通学制の大学院生よりも短い時間の中で学修、研究と学位論文執筆を所定期間内に達成するためには、本人の集中力と高い能力が求められるだけでなく、職場や家族の支援が欠かせない。指導教員も、指導の日時を学生の「すきま時間」に合わせていく柔軟な指導が求められることになる。

2) 社会人大学院生の Zoom による指導と利点

最初に述べたように、博士後期課程では、設置からの3年間、新型コロナウイルス感染症の蔓延のため対面の指導は行えず、すべての指導を Zoom システムに依存する教育体制がとられた。

研究指導は、博士論文本体の執筆以前に、外国語研究論文の読み合わせ、研究の綿密な計画、研究倫理審査申請のための書類作成、研究の実施、データ解析、解釈、研究成果の学会発表指導、学内の研究発表会のスライド作成指導、学会誌への投稿論文指導など、多岐にわたる。「研究指導」でスクーリングに必要とされる基準時間は、規程上は年間24時間である。一回2時間の指導をするのであれば年間12回のスクーリング、3年間で36回72時間である。Zoomによる指導も、この時間を超えていけばよいことになるが、指導学生が提出した学位論文は243頁になっている。学位論文本体の指導だけでも、所定の時間で足りるものではない。実際に行われた Zoom 指導は、最終的に3年間で202回になっていた。これだけの回数の指導が可能だったのは、指導の媒体が Zoom システムだったことによる。

通学制の大学院は、専用の研究室があることで、日常的に教員から対面指導を受けることができる、同級生、上級生からの研究の刺激や情報を与えられるなど、さまざまな教育的利点がある。他方、Zoomに限定された指導関係には不利な点も多いが、Zoomには、とくに通信制の社会人大学院生にとって、いくつかの利点がある。まず、学生にとっても教員にとっても最大の利点は、対面指導のようにキャンパスに移動する時間が不要になり、「すきま時間」での指導が可能になることである。また、学費負担が軽くない大学院生にとっては、時間のコストだけでなく、毎回の交通費という経済的コストがなくなることも無視できない。

指導の過程では、Zoomによる指導のほかにメールによる指導も行われている。しかし、メールでは学生は疑問や計画案、スライド案、論文案などを文章化しなければならないし、指導する側も、なぜこのような修正をしなければならないか、理由を文章化するというステップが必要になる。これに対して、Zoom指導では、該当箇所を画面共有しながら口頭で説明できるので、文章化という時間のかかるステップを省略することができる。また、直に画面で修正を確認することもできる。さらに、必要な文献はその場でインターネット経由で検索し、すぐに内容を共有することができる。新型コロナ感染症の問題が解消されたとしても、職業を持つ社会人大学院生の教育では、Zoomなどのシステムを利用した指導は、今後も単なる対面指導の代替手段という以上の教育的役割を担うことになるだろう。

3. 研究指導の成果と課題

1) 学生の研究成果に対する外部の評価

社会人大学院生の研究指導では、当該学生も指導教員側もコストは小さくなかった。しかし、コストの分だけ、外部の評価も大きいものになった。

学生は今年度、研究成果に対して複数の全国的規模の学会の賞を受けている。2022年9月には、第37回産業・組織心理学会の「優秀学会発表賞」を「新しい『包括的アサーション・トレーニング』と効果の検証」に対して授与された。この大会で受賞した研究は、2件のみである。また、2023年2月には、一般社団法人日本防衛衛生学会誌『防衛衛生』（2022年第6巻5・6号）に掲載された論文「航空自衛隊レジリエンス・トレーニングの効果の検証」によって、年間一人だけに与えられる優秀論文賞である「優秀論文発表者」に選ばれた。どちらの研究も本人の業務に根ざしたもので、本学の博士後期課程では日本でもトップレベルの実践的な研究が行われうることを示すものであるといえる。

さらに、全国的規模の学会の賞を受賞した者は学長が表彰するという、本学の「学則」に基づいて、学生は開学以来最初の学長表彰を受けることが決定された。

2) 研究指導上の本学の課題

博士後期課程の設置時に、本学は国際的な文献データベースと電子ジャーナルの契約を

する整備を行った。これは設置の条件でもある。海外の文献データベースと電子ジャーナルの費用は、高額である上に年々値上げによる経費負担が増加していくため、どこの大学でも重荷になっている。本学の場合、経費上、設置時に多くの分野の整備を行うことは難しかった。そのため、博士後期課程入学者の主なキャンディデイトがいる教育分野と看護分野の整備は行われたが、心理学分野まで予算を割くことはできなかった。

筆者2人が指導した学生の研究分野は、論文のタイトルからわかるように「心理学」である。海外文献の一部は「Google Scholar」経由で検索でき入手もできるが、限界がある。幸い、指導教員側が他の大規模大学図書館のリモート・アクセス権を持っていたため、関連文献を検索することも入手することも可能で、指導を行うことができた。しかし、今後心理学分野の大学院生を受け入れ続けるのであれば、この指導形態は望ましいとはいえない。他の分野の国際文献データベースや電子ジャーナルの利用実態にもよるが、現在、契約金額に見合った利用がされている可能性は高くない。そのような場合の解決策として、多くの大学で増加している契約形態、利用した文献のみについて支払いをする「pay-per-view」に契約形態を切り替えることが考えられる。

研究指導上の課題もまた、博士後期課程には残されている。

引用文献

- Abukari, A., & Abubakar, A. B. K. (2018). Using research to inform practice: The teacher as a practitioner researcher. *Journal for Researching Education Practice and Theory*, 1 (2), 1-5.
- 文部科学省(2018). 文部科学省の組織再編（平成30年5月時点）. 文部科学省. Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/other/1405395.htm. (2023年2月24日)
- Rossen, E., & Oakland, T. (2008). Graduate preparation in research methods: The current status of APA-accredited professional programs in psychology. *Training and Education in Professional Psychology*, 2 (1), 42-49.
- Snow, M. S., Wolff, L., Hudspeth, E. F., & Etheridge, L. (2009). The practitioner as researcher: Qualitative case studies in play therapy. *International Journal of Play Therapy*, 18 (4), 240-250.
- 惣脇 宏 (2010). 英国におけるエビデンスに基づく教育政策の展開. 国立教育政策研究所紀要, 139, 153-168.
- Straus, S. E., Glasziou, P., Richardson, W. S., & Haynes, R. B. (2011). *Evidence-Based Medicine: How to practice and teach it* (4th ed.). Elsevier.
- Winters, T. (2012). The practitioner-researcher contribution to a developing criticism for graphic design. *Iridescent*, 2 (2), 1-9.